

キューバ農業レポート⑦

キューバで出会った観光農業

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄—

キューバに実際に足を運んでみて分かったのは、キューバ農業は都市部を除けばプランテーションのなごりもあってサトウキビやタバコ等の単作による栽培が主だというイメージを持っていたが、実態は決して単調、一律な農業ではなく、それなりに地域性・多様性に富んでいるということだった。

キューバの西半分を走り回っただけにすぎないが、ハバナを出て最初に向かったハバナの東南部、車で5時間ほど走ったところにあるサパタ半島は湿地が多く、サパタ湿原国立公園となっている。またハバナの西に半日かけて出かけた世界遺産にもなっているビニャレス渓谷は、石灰岩の山々が雨で削り取られて中国の桂林のような景観を呈している。車で走りながら沿道に展開する農地も、草がまばらに生えた牛や羊等の放牧地が多いものの、サトウキビやキャッサバ、タバコ等が栽培されているところもあれば、水田も時々見かけることができた。



ビニャレス渓谷の農村風景

こうした多様な自然環境とすぐれた景観を生かして観光農業を展開していたのがビニャレス渓谷にあるラウル農場だ。ラウル農場が展開している観光農業はおそらくは最も先駆的なものであって一般的ではないと思われるが、今後、キューバの観光農業は、こうしたレベルまで質を高めていくことになるのだろう。今回は、このラウル農場を取り上げて、その観光農業とともに有機農業への取り組み実態を見ておくこととしたい。

◇葉タバコと野菜の有機栽培と牛耕

ビニャレス渓谷の一带はタバコの一大産地である。切り立った岩山が続いており、その岩山の奇景を背景にして、タバコを中心とした畑と、点在する民家がうまくマッチングし、地域全体として素晴らしい景観を形作っている。この一画にあるラウル農場は生産形態としては独立自営農民に該当するが、少なくとも4人以上の労働者を使って展開している。農場の中心には、屋根と柱だけで、どこからでも自由に入出りでき、数十人が飲食・休憩できるレストラン兼休憩所が設けられている。ここでは食事や、その場で果実を絞るジュース、さらにはビールやラム酒、モヒートをはじめとするカクテルなどのアルコール類も提供される。

ラウル農場の農地面積は13ヘクタールほどで、タバコ生産を中心としたゾーンと野菜を生産するゾーンとに分かれる。栽培して刈り取った葉タバコは合掌造りのような形をした昔ながらの乾燥小屋で乾燥させた上で葉巻



葉タバコ乾燥小屋の前の畑での牛耕

にされるが、この一連の工程の作業を見学することができるのはもちろん、乾燥した葉タバコを自分で巻いて葉巻を作る体験もできる。またここで生産された野菜はもっぱらこのレストランの食材として供されている。

この野菜とタバコは、自然環境を守っていくために有機で栽培されているが、畑の耕運には牛を利用する、昔ながらの「牛耕」が行われている。自然環境とともに伝統的な農法や乾燥小屋をはじめとする昔からのなりわいやたまたまを大事にしていること大きな魅力となり、キューバ国内の都会の住人はもとより世界各地から観

光客を呼び寄せている。例えば休憩所で一緒になった若者2人はベルギーから、また後に述べる馬に乗って周遊する途中の休憩場所で会った子ども連れの夫婦はスイスからだった。また岩山のあちこちでは、たくさんの人たちがボルダリング（道具を使わず、クライミングシューズのみで壁を登るもの）をしており、ボルダリングの絶好の場所としても海外の人たちを引きつけている。

◇馬がけん引する地域あげての観光農業

このラウル農場も含めて、この地域での観光農業の一番の目玉になっているのが馬に乗っての周遊だ。馬はよく訓練されており、初心者でも手綱さばきを教えてもらってすぐに一人で馬に乗ることができる。もちろん馬、数頭に1人、カウボーイが付き添ってくれることから、危険はない。畑や野山を縫うようにつながる道を片道30分ほど、往復で1時間、馬上の旅ができる。途中には上から谷間に広がる田園風景を一望できるところもあり、そこで30分ほど休憩する。

筆者が馬に乗るのは十数年前に内モンゴルを旅行して以来の2度目だが、馬に乗っての散策とやさしく吹き抜ける風、そして葉タバコやキャッサバなどが生産されている素晴らしい田園風景の中、至福の時を過ごすことができた。馬に乗っての田園や自然の中での散策は、癒やしや健康はもちろん、観光や地域おこしのツールとしても有効であり、きわめて大きなポテンシャルを持っていると改めて感じた。



山裾の草地の横を行く馬の散策ツアー

馬の散策ツアーはラウル農場だけでなく、この地域の農家や住民が一体となった連携で成り立っているようだ。休憩をした田園風景を一望できるところからだけでも5、6組のグループが馬で散策しているのが見えた。おそらくこの時、全体では10組前後のグループが散策しているものと推測され、1グループ5人としても、50頭前後の馬が仕事をしている計算になる。何十頭もの馬の管理・調教に加えて、たくさんの観光客に対応した馬の手配と付き添い、また馬に乗る場所までの馬車による観光客の送迎等と、全体のシステムがしっかりしているからこそ成り立っているのだろう。

地域住民の貴重な現金収入獲得の場となっているが、地域の人たちの連携する力と、馬を使った観光農業で地域振興をはかろうとする熱い思いがこの馬のツアーに凝縮されているようだ。

◇有機農業のきっかけは環境保全

ラウル農場は全面的な有機栽培に取り組んでいるが、そのきっかけは、この地域が98年に国立公園に指定されたことにあるようだ。国が自然環境を守る一環として有機栽培推進のプロジェクトを展開する中で、5、6カ所設けるモデル農場の一つとなるよう打診を受けたという。

頻りに市の指導員がきてチェックし、アドバイスしてくれることから、有機栽培の技術面での問題はないと言う。農場での作業を担当しているアントニオ氏（78歳）の話では、堆肥作りとともにできるだけ自家採種に努めており、また混作しながらの輪作体系をしっかりと組んでいるとのこと、「有機栽培は手間がかかるが、それなりの収量を確保できるだけでなく、安心を与えてくれる。もっと有機栽培は広がったほうがいい」と主張する。

なお、同じ地域でも隣の農場では化学肥料を使用しており、有機栽培ではないという。有機農業の取り組みはまだ「点」にとどまっており、「線」にもなっていないと言えそうだ。

薦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業、1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長、常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的デザイン研究所代表

〔主な著書〕

「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）「農的社会をひらく」（創森社）など